

追悼

上原一慶先生を偲んで

中国現代史研究会代表、同理事、機関誌『現代中国研究』編集委員長などを歴任され、本研究会の発展に多大なご貢献をされた上原一慶先生が、2014年2月2日にご逝去されました。編集委員会は、上原先生のご業績を振り返り、先生のご人徳を偲ぶ企画として、先生と学問的にも個人的にも親しく交流されていた山本恒人先生(大阪経済大学名誉教授)と森武麿先生(神奈川大学教授・一橋大学名誉教授)に、追悼文のご寄稿をお願いしたところ、山本先生には上原先生のご業績を中心に、森先生には上原先生との私的なご交流を中心に、上原先生のお姿が眼前に現れるような珠玉の文章をいただくことができました。ここにその全文を掲載します(編集委員会・加藤弘之)。

「中国の国家と経済、社会と民衆」徹底解析を全うした人生

山本 恒人

上原兄。同じ年とは言え、私はメールでは一慶先生のことを常に上原兄と呼んで参りました。私が大学院で勉強を始めた時、あなたはすでに現代中国研究の名著『中国社会主義研究』を上梓されていました。あなたが京都大学に赴任されたとき、私ども関西の研究者は勇躍したものでした。あなたは学会や中国現代史研究会のリーダーとして強い責任感と温かい包容力をもって活躍を始められました。京大経済研究所での活発な共同研究の一方、日中経済協会関西本部での隔月調査委員会では、現実感覚を大切にしたいと、ビジネスマンや若き研究者と共に現地調査と分析を重ね、藤本昭先生が第一線をお引きになる際、主査をバトンタッチされました。協会では21冊もの研究調査報告書に関与されました。

脳梗塞の発症後、懸命のリハビリで見事に回復を遂げられた2005年、われわれのメインテーマで2年連続現地調査をやろうと、瀋陽・北京・長江デルタの労働調査を提案されました。その時、私はあなたの真骨頂を見る思いでした。市場経済化に乗り遅れたとはいえ、現代都市に急変貌する瀋陽で、調査の後、あなたは労働者街の居酒屋で食事しようと言いました。出てきたのは白酒と豚の血を固めたスープ、さすがにこれは身体に良くないと少し啜っただけでした。北京での定点観測地点は陶然亭公園、時々的情勢下で市民がどんな表情をしているかを毎回確かめるのだ、と。上海では上海駅裏に広がる貧民街が定点観測点。足を少し引きながら元気いっぱい歩き回っていました。

私は東京山の手の高い知的环境に生を受けたあなたがどうしてそのような嗅覚と柔らかい視野を身につけたのか、考えさせられたものでした。きっとあなたは、研究上のぶれ

ることのない軸足を、定点観測を通じて自らチェックしていたのでしょう。もう一つは北京の全国総工会でのことでした。あなたは一通りのヒアリングの後、「中国の労働組合はどうして大半の維持運営経費を企業からの拠出金に仰いでいるのか、それで労働者の權益を本当に守ることができるのか」と切り込みました。総工会幹部は天井を仰いで無言のままでした。「これは答えられないよね」と私が言うと、あなたは「そんなことはない、うまくいっているならそうと、改善途中ならその議論を紹介したらいい、失礼だよ」。こと研究上の問題で妥協することのない兄の面目躍如たるものでした。

2013年7月、大阪商業大学での最終講義の後のご慰労会で、あなたは私どもに、「5年前に医者からあと3年と言われていたのだよ」と言いました。てっきり、脳梗塞が完全回復には至らなかったのかと、受け止めたのは大間違いでした。亡くなる前日、奥様から多発性骨髄腫と伺って驚きました。医者からの告知1年後、同大学創立60周年国際シンポジウム「中国の経済発展と社会変容」を企画から中国の三人の講演者招聘まで取り仕切り、満杯の講堂であなたは明快に趣旨説明をされました。京大退官後招聘を受けた大阪商業大学に比較地域研究所所長として責任を果たそうと懸命だったのです。そして遂に2009年、あなたは精魂こめた最後の単著書、その名も『民衆にとっての社会主義-失業問題からみた中国の過去・現在そして行方』を刊行しました。何という起承転結だったのでしょうか。中国の国家と経済、社会と民衆、この永遠のテーマにメスをいれ続け、見事に結実させたのです。

上原一慶先生。今は、大好きだったお酒を傍らに、頭と心と体をゆったりとお休めください。そして、あなたが育て、大陸、台湾、日本で研鑽を積む若き後継者たちを見守り続けてください。

友人達を代表して

(やまもと つねと・大阪経済大学名誉教授)

上原一慶さんを偲ぶ —上原一慶さんと世界旅行—

森 武麿

いま、上原さんと一緒に世界を旅した記念写真を見ている。若々しい上原さんが今にも私に話しかけてくるような気がする。しかし彼はもういない。

上原さんと私の付き合いは40年に及ぶ。上原さんが1974年に東京大学大学院から駒沢大学経済学部就職しその1年後に、私が一橋大学大学院から同じ職場に就職したためである。それ以来の付き合いである。

上原さんは、1981年に駒沢大学から京都大学に転職されたので、駒沢大学での同僚と